



みんなで手を携え、支え合い、ぬくもりのある街にしていきたい。そんな思いを胸に、地域でグループで、生き生きと活動続ける人たちがいます。

海外アーティストを札幌に招き育成

札幌アーティスト・イン・レジデンス実行委員会「SAIR」

アーティスト・イン・レジデンスとは、海外の芸術家を一定期間地域に招いて、実際に現地で創作活動を行ってもらう制度。芸術家には、滞在費や生活費、創作スペースなどが提供され、芸術活動に専念することができず。また、滞在期間中、地元で芸術家たちと交流することで互いに触れ合い、地域に新たな可能性が生み出されます。

これまで地域と芸術家の交流を取り持つこのような文化事業が、日本にはほとんどありませんでした。そこで、自由で新しいものを好む札幌の土地柄に着目し、現代美術の分野で、五年前にこの活動を

始めたのが、市民団体「SAIR」です。事務局長の柴田尚さんは「自分の周りの芸術家が同様の制度を利用して海外で大きな成果を挙げました。札幌を拠点に海外の芸術家を手助けすることで、ここから世界的な芸術家が生まれれば」との思いから数人の仲間と活動しています。

「文化庁と市からの援助はありますが、それだけでは足りず、資金集めには苦労しています」と柴田さん。活動の趣旨を理解してもらえようという企業にお願いして回る毎日です。実行委員会がこの活動で特に力を入れているのが芸術家と市民との交流です。札幌を

訪れるアーティストには、必ず小学生との共同制作や大学生、一般市民向けの講義など、ふれあいの場を設けています。「現代美術の自由さを生かして誰もが参加できるユニークなプログラムを取り入れています。その中で、美術は難しいものという先入観を取り払って欲しい」と柴田さんは語ります。

滞在期間は通常三カ月間。半年ごとに三人ずつ、計六人が今年度も札幌を訪れます。九月から滞在中のドイツ人芸術家のレジナー・フラン

クさんは、「異国での生活は驚きの連続で、創作活動に大きな刺激を受けています。言葉が通じないからこそ想像力がかき立てられ、生み出される芸術もあります」と話します。五年間で招く芸術家の数は三十二人。三月二十七日(木)から、これまでに招いた芸術家や受け入れにかかわった地元芸術家による展覧会を道立近代美術館で開催します。展覧会には札幌にインスピレーションを受けた作品も並びます。興味のある方はぜひご覧ください。



豊平区東園小学校で行われたレジナーさんと小学生との共同制作。生徒が話す言葉から連想するイメージを、別の生徒が墨で描いていきます。参加した生徒は「面白かった」とみんな大満足の様子でした。

お問い合わせは札幌アーティスト・イン・レジデンス実行委員会 ☎820-6056 ホームページ <http://www.iacnet.ne.jp/~sair/>



広告欄